寄贈品「ラッパ」の話から

ピースあいち研究会　　丸　山　　豊

「タッタカ・タタ　タッタカ・タタ　ターンタ　ターンタ　タタタ」（注1）これはラッパのCMである。大幸薬品のマークはラッパ。その主役は正露丸だった。当時の本名は「征露丸」である。もちろん露を征するの意、日露戦争に由来する。（CMの曲は帝国陸軍食事ラッパ。ユーチューブで再生可能）

１１月８日付けの中日新聞、ピースあいちに寄贈された「ラッパ」（写真左）の記事に注目した。名古屋第三師団の訓練で使われていたラッパということである。軍隊とラッパは切り離せないだけに貴重なものである。（注２）

戦前の男の子の夢は「兵隊さん、その中でも喇叭（ラッパ）吹き」だった。修身の「キグチコヘイハ　テキノ　タマニ　アタリマシタガ　シンデモ　ラッパヲ　クチカラ　ハナシマセンデシタ」（下図参照）。木口小平は日清戦争の話だ。尋常小1年生の修身書（第三期版）の最初のカタカナ文字が「テンノウ　ヘイカ　バンザイ」その直後に「キグチコヘイ・・・」が登場する。小１に「忠義」をたたき込ませる狙いだった。見事な教材配列に驚くばかりである。

ピースあいち「教科書特別展」より

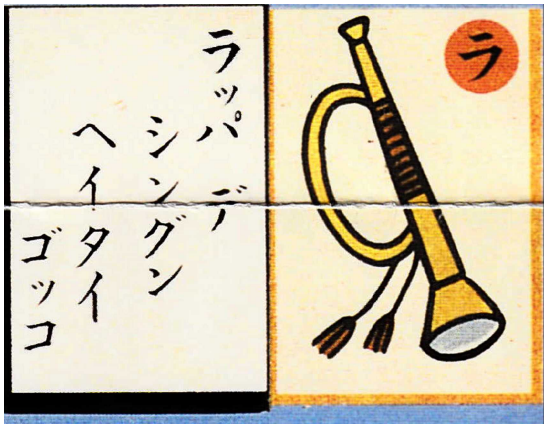
ラッパ卒木口小平は英雄視され1902年～1945年まで教科書にあったから、親も子もたたき込まれ、お経のように「キグチコヘイハ　シンデモ　ラッパヲ　ハナシマセンデシタ」

が蘇ってくる。戦争美談は英霊となることであり「ラッパ」と結びついた。
　アジア太平洋戦争中の国民的軍事歌謡「♪進軍ラッパ聴くたびに　瞼に浮かぶ旗の波」（露営の歌）の作曲者、古関裕而の中にもキグチコヘイがいた。

（新樹社　2016　より）

　新美南吉作「ヒロッタラッパ」が近年高い評価を得ている。これは南吉２２歳（東京外語４年）の１９３５年に書かれた。この作品の背景に柳条湖事件、満州事変、満州国、満蒙開拓団、華北侵略がある。「土地を奪われた中国の農民の悲哀」と日本の若者の交流と争いのない未来が描かれ、南吉の戦争批判ともいわれる作品だ。
　（右の絵本の後書きには「戦場で手柄をたてようと出かけた男が、途中で戦争のため田畑を荒らされて打ちひしがれている村人の姿を見て、戦争に行くのは止めて、村人を励ましながら復興への手助けをするという、南吉の平和を希求する思いが込められた童話」と保坂重政は書いている。）
　このとき満州に派兵されていたのが名古屋第三師団である。南吉の周りに名古屋６連隊、豊橋１８連隊から満州に「出征」した者がいたのかもしれない。この作品は戦後発表された。戦中の発表を敢えて避けたと解釈すると南吉への評価も変わるだろう。

　もう一つのラッパの話である。「愛国いろはカルタ」だ。１９４３年に子どもたちが応募したカルタの「ラ」に登場する。「ラッパデ　シングン　ヘイタイゴッコ」が入選した。ラッパで応募した数は多かったはず。子どもとってラッパは、一糸乱れぬ行動の号令合図であり憧れだった。



　師範学校は全寮制で、ラッパによる起床点呼などで日常生活がコントロールされていた。学校教育の軍隊化の原形はラッパにあった。出征兵士をラッパで見送った地域もあったという。今はチャイムだが、明治期の中学校では、始業や終業などの合図はラッパのところもあった。こうして学校教育にラッパ鼓隊が軍国主義と一体化して地域とともに浸透していった。ブラスバンドは軍楽隊から生まれたわけである。（余談だが筆者は学生時代、吹奏楽部に所属して熱中していた。）

　ラッパの歴史を遡ると、黒船来航になる。ペリーは軍楽隊も連れてきた。そのとき、日本人は初めてラッパを見た。戊辰戦争の時、薩長軍の東征行進歌「みやさん　みやさん　お馬のまえに・・・」（トコトンヤレ節）は主に笛と太鼓であり、ラッパが使われた記録はない。やがてラッパは信号手段から「ラッパに始まり、ラッパに終わる」大日本帝国軍

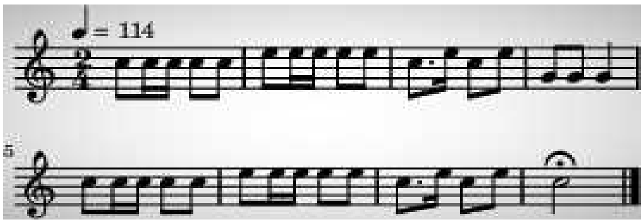
隊の必需品となり、軍楽隊の主役にもなっていく。現在の自衛隊でも同じである。

１９６４年の東京オリンピック開会式でのファンファーレ、古関祐而作曲の「オリンピックマーチ」は自衛隊が演奏した。当時の私はその見事な演奏に酔いしれた。

今回の寄贈品「ラッパ」は、それ一つで多くの歴史を想起させてくれた。

・・・

注１：大幸薬品の CM 楽譜　（帝国陸軍食事ラッパ）



注２：ピースあいち「第９回寄贈品展」は 2021 年 12 月 7 日～翌 22 年 2 月 26 日まで開催される。